

ZOCALO²⁰²² 10 ▶ 11

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

桃源郷通行許可証

企画展「桃源郷通行許可証」
2022年10月22日(土) ~ 2023年1月29日(日)

新しい視点から美術館のコレクションを紹介する手法として、近年、様々な美術館で現代美術とコレクションを組み合わせた展覧会が開催されています。コレクションや美術の魅力が多角的に伝えることは、美術館の重要な使命のひとつですが、特に近年は、社会状況の変化とともに美術館の役割や存在意義が問い直され、美術館のコレクションに改めて光が当てられているという背景もあるでしょう。こうした展示は、現代美術と過去の作品の相互作用によって、芸術作品を捉え直すための新たな視座を与え、私たちの想像力を豊かに刺激してくれます。

「桃源郷通行許可証」もまた、幅広い世代の6名の作家を中心に、多様な時代、ジャンルの作品を埼玉県立近代美術館のコレクション等と組み合わせて展示することによって、芸術作品の時空を超えた魅力を探る展覧会です。展覧会の準備は、出品作家とともに、当館のコレクションを見直すことから始まりまし

た。担当者がこれは！と思う収蔵作家や作品を作家に紹介することもあれば、データベースやカタログを見ながら、作家の側から気になる作品を提案してもらうこともありました。作家たちによるコレクションの解釈は、普段MOMASのコレクションに触れる機会が多い私たち担当者にとっても新鮮で刺激的なものでした。コレクションの選定と並行して、新作を含めた作家の作品選定や展示空間の構成など、具体的な検討を重ねています。

ところで、少し謎めいた展覧会タイトルは、松井智恵の本展出品作品《青蓮丸、西へ》のモチーフから取っています。松井の創作した物語の中で、「桃源郷通行許可証」は、旅の途中で別れた仲間が再会し、彼らがふたたび「桃源郷」へ行き着くためのアイテムとして登場します。「桃源郷」は、中国の詩人・陶淵明の記した物語「桃花源記」に由来する、現世の奥深くにありながら、世俗から解放された場所です。古来、多

くの文人たちに憧憬され、画題としても親しまれていた理想郷ですが、ここではない場所を想い、異なる時空間を自在に行き来することを願うとき、芸術作品は私たちに多くの示唆を与えてくれる、言うならば「桃源郷」へ辿り着くための「通行許可証」のようなものとして捉えられるかもしれません。

当初2020年度に開催予定だった本展覧会は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、約2年間の延期を経て開催されることになりました。今回参加する6名の作家は、テーマや手法は異なりますが、リアルな感覚を頼りに、風景や物語、インテリア、庭など、日常や現実のはざまに潜在する様々な事象を細やかに掬い取ろうとしています。開館以来40年にわたって積み重ねられてきた当館のコレクションと響きあうことでどのような空間が生まれるのか、ぜひご期待ください。(S.H.)



山本梅逸《青緑桃源図》1846年 遠山記念館蔵(前期展示)

出品作家(50音順) × MOMAS コレクション

稲垣美術 × 駒井哲郎

稲垣美術 INAGAKI Miyuki | 1989年神奈川県生まれ。東京藝術大学大学院博士後期課程博士号取得。庭や空き地、住居等をモチーフに、土地や風景、個人との相互作用的な関係性によって生じられるイメージを考察し、ペインティングやインスタレーションによって再構築する。



稲垣美術《Largo (幅広くゆるやかに)》2020年 作家蔵

佐野陽一 × 斎藤豊作

佐野陽一 SANO Yoichi | 1970年東京都生まれ。東京造形大学卒業後、同研究生修了。ピンホール・カメラの原理を援用した手法で、山や湖畔、池、木漏れ日、温室などを被写体に、刻一刻と移ろい揺らぐ光の表情を捉えた写真作品を制作する。



佐野陽一《flow》2015-17年 作家蔵

東恩納裕一 × マン・レイほか

東恩納裕一 HIGASHIONNA Yuichi | 1951年東京都生まれ。日常的なインテリアや日用品に潜む違和感を、LEDや蛍光灯を使ったオブジェ、スプレーペインティング、アニメーションなど様々なメディア、手法を用いて複層的に表現する。



東恩納裕一「Large Interior」展示風景 (void+, 2021年) Photo by Masatoshi Mori, Courtesy: void+

文谷有佳里 × 菅木志雄

文谷有佳里 BUNYA Yukari | 1985年岡山県生まれ。東京藝術大学大学院修士課程修了。愛知県立芸術大学作曲専攻在学中にドローイングの制作を始める。ペンや鉛筆、カーボン紙を用いて即興的に様々な種類の線を描出し、紙上に身体的な空間を表出させる。



文谷有佳里《drawing 2022.6.25》2022年 作家蔵 Photo by ToLoLo studio

松井智恵 × 橋本関雪

松井智恵 MATSUI Chie | 1960年大阪府生まれ。京都市立芸術大学大学院修了。写真、映像、ドローイングなど幅広いメディアを用いて、詩的な物語を喚起させるインスタレーションを手がける。SNS(インスタグラム、フェイスブック)に毎日一枚ずつ、「一枚さん」を公開中。



松井智恵《青蓮丸、西へ》2018年 展示風景 (MEM, 2019年) 作家蔵 ©Chie Matsui, Courtesy of MEM

松本陽子 × 菱田春草ほか

松本陽子 MATSUMOTO Yoko | 1936年東京都生まれ。東京藝術大学卒業。1967年から翌年にかけて滞在了アメリカでアクリル絵具に出会い、帰国後本格的に制作に着手する。1980年代から90年代にかけてピンクを主調とした独自の抽象絵画を確立する。2005年以降、再び油彩画を制作する。



松本陽子《黒い岩》1990年 東京都現代美術館蔵

研究ノート 吉田克朗の「表現」をめぐって

1971年の秋に開催された第7回パリ・ビエンナーレに参加した吉田克朗(1943~99年/深谷市出身)は初めて渡欧の機会を得て、《赤・カンヴァス・電気など》を現地で制作し出品します。この年のパリ・ビエンナーレは、小清水漸、榎倉康二、李禹煥、中平卓馬など、日本で先鋭的な活動をしていた作家が出品したほか、コンセプトアート、フォトリアリズム、シュポール/シュルファスといった動向に関わる欧米の作家も参加していました。同時代の新たな傾向が紹介された国際展であったといえるでしょう。

《赤・カンヴァス・電気など》の発表当時のオリジナル作品は現存していませんが、作者の撮影した写真が残されています。それを見ると、展示室内の柱から壁に向けて水平にカンヴァスを張り、5つの矩形の中に斜めの赤い筆触を反復させ、その前に5つの電球をぶら下げて点灯させた作品であったことがわかります。空間を物理的に仕切るカンヴァスの布地や煌々と光る電球は、事物としての表情を見せる一方、斜めの筆触、赤い色彩、矩形というフォーマットは絵画的な印象を感じさせます。すなわち、この作品には

異なる要素が併存していると言えるのです。

この作品が発表された1971年は、もの派の動向の震源にいた吉田が、その非造形的な傾向に限界を感じつつ、新たな方向性を模索し始めた時期にあたります。1968年に多摩美術大学絵画科を卒業した吉田は、もの派の形成期にあたる1969年を境に作風を転換させます。翌年にかけて、異質な物体の組み合わせ、物体の状態やそれが置かれた場所への着目、重力やテンションを伴う物体の提示など、もの派の特質を示す作品を、一連の動向の先鞭を切るかのごとく集中的に発表していきます。ところが、1971年1月のシロタ画廊での個展で、画廊の壁や床に帯状に赤い筆触を連ね、その前に視線を遮るようなワイヤーロープを張った作品を展示します。その場の空間自体を意識させる手法であると同時に、この作品においてももの派の時期には敬遠されていた、色を塗るという表現行為に、吉田が一步踏み出したのがわかります。

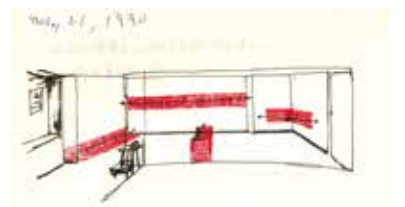
ただし、当時の作者の制作ノートを読むと、「表現」ということを巡って繰り返し自問しています。表現が作為的になったり、何らかの概念の提示になったりせず、表現からできうる限り意

味を排除し、「表現の表現たりうる自立性」を存立させることは、果たして可能なのかという問いかけです。この難題に向き合いながら、シロタ画廊やパリ・ビエンナーレの作品では、ニュアンスを伴わない明快な色彩の赤を用いて、筆触を淡々と反復させ、さらに絵画的な表現を相対化させるために、ワイヤーや電球などの事物を即物的に組み込んだと言えるでしょう。絵画あるいは芸術表現の制度に対する問い直しが盛んに叫ばれた60年代末から70年代初めにかけては、安易に絵画を描けない時代でした。その時代状況の中で、絵画的な表現を取り戻すため、吉田が手探りで模索を始めていたことが窺えるのです。

当館は2点の吉田の初期作品、《650ワットと60ワット》(1970年)と《赤・カンヴァス・糸など》(1971-74年)を所蔵しています。特に後者は会場の制約で展示が叶わなかったのですが、もともと第7回パリ・ビエンナーレに出品するために制作された作品です。これらの作品は、吉田がもの派の作風を経て次のステップに移行することを迫る上でも、当時の時代状況を検証する上でも、大変貴重な作例と言えるでしょう。(H.I.)



吉田克朗《赤・カンヴァス・電気など》(1971年) / 作者が撮影した第7回パリ・ビエンナーレでの展示風景。前景には、カンヴァスやゴムの上に石を載せた李禹煥の作品。



吉田克朗「1971年のシロタ画廊の個展で発表した《赤・ワイヤーロープ・壁など》に向けたプラン」/1970年11月21日の制作ノートより